

## 付 録

- 1 地域の取組と市町村の対策に係る  
自治体アンケート結果
- 2 高齢社会対策基本法  
（平成7年法律第129号）
- 3 高齢社会対策の大綱について

## 付 録 1

### 地域の取組と市町村の対策に係る自治体アンケート結果

今後の前例のない本格的な高齢社会を、安心して活力ある社会としていくためには、高齢者が日常生活する地域の機能と国民に最も近いところにある自治体である市町村の取り組みが重要であり、今後、向上が期待されていることを示した。しかし、それらの期待は今まであまり把握されることがなかった。このため、今般、内閣府において、その両者について、地方自治体の協力を得て、アンケート調査を実施した。

以下に調査で把握した事例について特徴的なものを紹介する。

#### 1 地域における高齢者が主体となった取組事例

都道府県、指定都市及び中核市に対してアンケート調査票を配布し、回答のあった28県10市について取りまとめを行った。調査は、各自治体の管内における、民間による高齢者を支える取組について、現在、把握しているものに関する情報の提供を依頼するものであった。調査を集計した結果を地域における取組事例として、

- a 高齢者による支え合いの取組事例
- s 高齢者による子育て支援の取組事例
- d 高齢者による健康増進のための取組事例
- f 高齢者による学習・社会参加に係る取組事例
- g 高齢者による地域への貢献についての取組事例
- h 高齢者の生きがい活動への取組事例の6つの類型に分類し、各々について、代表的なものを以下に紹介する。

#### a 高齢者による支え合いの取組事例

##### 一人暮らし高齢者に地域でサロンを開設（群馬県高山村）

群馬県高山村の「ボランティアいぶき（村の社会福祉協議会が中心となって結成）」では、平成5年に70歳以上の一人暮らしの高齢者などを対象に村の温泉施設へ送迎する取組を始めた。開始当初は送迎のみであったが、利用者に大変好評であったため拡充し、平成8年から「ミニデイサービス」として、入浴の他に近隣の施設においてサロンを開設し、保健師による血圧測定等を行うとともに、参加者全員で昼食を共にしたりゲームをしたりして楽しいひとときを過ごしている。ある参加者は「入浴はもちろんだが、他の人たちとの会話が楽しみです。」と話す。

活動当初の参加者は6名ほどだったが、現在では36名になっている。

高山村では「気軽に参加していただき、生きがいをもって過ごしてほしい」と話している。

#### 高齢者が高齢者の日常生活支援サービス（岩手県花巻市・北上市）

岩手県の「花巻ゆいっこの会」では、花巻市と北上市を活動範囲に、介護保険制度の対象とならない高齢者、障害者等を対象に、掃除、ゴミ出し、買い物等の「生活支援」や食事、入浴、排泄の介助といった日常的な「身体援助」のサービスを提供している。

活動は平成元年から実施しており、サービスを提供する会員は現在26名で、高齢者や障

害者が中心である。同会では、会の存在意義は、支援が必要な人にサービスの手を差し伸べるだけでなく、働く意欲のある高齢者や障害者の受け皿となっているところにもあるとしている。皆自分の体調などに合わせ、無理のない範囲で活動している。

会の代表は「誰もが地域で安心して生活できるよう、生活上の不便や悩みを手助けし支え合うことを目標に活動していますが、18年間続けてきて感じるのは、働きたいとか手助けしたいという『意欲』さえあれば、年齢にかかわらず、また、たとえ障害があっても社会貢献が十分に可能だということです。社会貢献を通じて社会に参加している自負が出てくれば、それが生きがいになると思います。」と話している。

### 施設に入所している高齢者との文通を通じた交流（静岡県沼津市）

静岡県沼津市のNPO法人「さわやかふみの会」（会員26人）では、月1回（毎月23日）特別養護老人ホーム等に入所している高齢者と文通をしたり、年賀状や暑中見舞いを持参して手渡したりして交流を図っているほか、文通を通じて他の地域の高齢者等と情報交換を行っている。

「さわやかふみの会」は、昭和62年から郵政省（現：日本郵政公社）が実施していた「郵トピア構想」（地域社会の発展に役立つ郵便サービスをモデル的に行う事業）のモデル都市に沼津市が指定されたことに伴って発足した「文通友の会」が前身である。沼津市と同様に指定された他の都市の「文通友の会」と交流するとともに、地域のお年寄りと文通で交流を深めてきた。

平成14年にNPO法人格を取得してから

は、文通に加えて特別養護老人ホームを訪問したり、地域の小学生に戦争体験を語り聞かせるなど、活動の幅を広げている。

ある会員は、「老人ホームに年賀状や暑中見舞いを届けると、お年寄りにとても喜んでもらえます。そういう時はこちらも達成感でいっぱいになります。」と語る。

会員の中には、一人暮らしであったり、家族を介護していたりと様々な環境の者がおり、定期的に仲間が集まること自体も楽しみとなっているという。

別の会員は「さわやかふみの会の会員は、少しでも社会に役立てたらと、努力している人たちがばかりです。大切な仲間と今後も頑張っ

### 5 高齢者による子育て支援の取組事例

#### 高齢者が子供たちに田植え、稲刈りなどを教えて農業の大切さを伝承（秋田県秋田市）

秋田市の「台町老人クラブ長生会」では、平成8年から初夏と秋に、同地区の小学生に対して地域の農家から水田を借り受けて、水田での田植え、稲刈り、脱穀などの農作業の指導のほか、縄をなったり、餅つきを行ったりして、子供たちに農業の大切さを伝える活動を行っている。

活動を始めたきっかけは、地域の小学生が、家業が農家であるにもかかわらず、ほとんどの子供が田植えも稲刈りも体験したことがない現状を知ったことであった。

参加している高齢者は「子供たちと触れ合うことでクラブ会員にも活気が生まれます。子供たちが農業に興味をもってくれることもとてもうれしいです。」「農業について理解することにより、地域文化の伝承にもつながると思う。」と語る。

本活動は、同地区の小学校の学校行事に位置付けられ地域と学校が連携して取り組んでいる。

#### **小学生の下校時刻に合わせて「子ども見守り隊」 (埼玉県鳩ヶ谷市)**

埼玉県鳩ヶ谷市では、自治会、老人クラブなどが合同で「子ども見守り隊」を結成し、概ね週1回、子供たちの下校時間に合わせて通学路を巡回し、見守り活動を行っている。

30人のメンバーを5班に分けて班単位で活動しているため、1人の隊員が巡回するのは概ね月1回である。また、服装を緑色のジャンパー・帽子で統一しているため、子供たちも判別しやすいほか、地域の方から慰労の声をかけてもらうこともある。

ある会員は「『御苦労様』と声をかけてもらうことがとても励みになっていきます。また、他のメンバーと会って会話をするのも楽しめで、連帯感も生まれています」と語る。

鳩ヶ谷市では「最近の子供や高齢者を取り巻く環境を考えると、警察や行政機関だけでは目が届かない。きめ細かな地域の目で見守っていくことが必要不可欠であるので、今後とも是非継続してほしい」と話している。

#### **d 高齢者による健康増進のための取組事例 小学校の空き教室を利用してIT教室や筋力トレーニング(埼玉県北本市)**

埼玉県北本市で活動する「西2クラブ」では、平成17年12月から、週2日、インターネットや電子メールなどのパソコンの操作方法を学ぶIT教室、筋力トレーニング、体操などの運動教室を実施している。参加しているのは会員44名で、教室終了後の時間は会員どうし交流の機会となっている。

これらの活動は小学校の空き教室を利用して実施しており、終了時刻を小学生の下校時刻に合わせ、小学生と一緒に下校しているため、防犯の目的も担っている。

参加している会員は「上がらなかった手が上がるようになった」、「夜眠れるようになった」など体調の改善のほか、「講習で習ったメールを会員どうしで交換でき、楽しみが増えた」、「孫のような児童と帰ることが楽しい」と語る。

#### **「健康クラブ」でストレッチやレクリエーション(石川県加賀市)**

石川県加賀市の「作見健康クラブ」では、平成16年4月から、有志40人が毎週金曜日に町内の公民館において、ストレッチ、筋肉トレーニング、レクリエーションなどの活動を行っている。また、年1回、仲間と観光施設の見学や大聖寺藩の菩提寺で昔の話を聞く勉強会を開催している。

参加者は、「週1回の金曜日が待ち遠しく、楽しみにしています。」「友達も増え、体調もよく、家族との協調性も豊かになり、生き生きとした老後の生活を送っています。」と語る。

また、作見健康クラブでは、下校時の巡回活動も行っており、地域の安全にも貢献している。

#### **e 高齢者による学習・社会参加に係る取組事例 高齢者が講師になって「パソコンクラブ」(群馬県安中市)**

群馬県安中市の「高齢者パソコンクラブ」では、「同世代の講師による無料のボランティアクラブ」をコンセプトに、週1回、「高

「高齢者パソコン講座」を開催している。現在、60歳から80歳の会員30名が活動しており、パソコンの初心者であっても理解できるよう懇切丁寧な指導を心がけている。

設立のきっかけは、同クラブの代表が「パソコンを使えない高齢者は社会の中で取り残されてしまうのではないかと危機感を抱いたこと」にあった。また、「もともと敷居の高いパソコンの習得にお金を払ってまでは来ないのでは」とも考え、無料で受講できるよう、会場とパソコンは無料で貸し出してもらえよう安中市と交渉し、実現した。プリント用の紙やインクなどの消耗品費は、受講者が自発的にインク代等を負担してくれるようになり、活動が軌道に乗り出した。

同クラブの代表は「もっとレベルやコースを充実させたいと考えており、企業を回って不要になった古いパソコンを譲り受けて、会員に貸し出しています。パソコンは現代のコミュニケーションのツールなのだから、上手に使って日常生活に役立ててほしい」と語る。

### 高齢者大学OBが自主的にサークル活動（神奈川県相模原市）

神奈川県相模原市が昭和56年から主催する高齢者大学（通称：あじさい大学）では、美術、文学、書道、健康、歴史などの講座を実施している（平成18年度実績で37学科、定員1,200人、期間1年。）講座を終了したOBが自主的に集まってサークル活動を継続しており、現在、その数は約140にのぼっている。

各サークルとも、月1～4回程度、1回2時間程度の頻度で活動をしており、学習の継続、作品展・発表会の開催を通じて会員の交流と親睦を図っている。

ある会員は「活動を通じて会員相互や会員

以外の高齢者との交流の機会が増えたほか、発表の場が目標となり、生活に張りができた。」と語る。

あじさい大学を主催する相模原市では、「サークル活動における、学習や発表を通して、会員相互の親睦、他世代との交流が図られることは、活動している高齢者の介護予防に資するとともに地域の活性化にも繋がるものです。今後も支援をしていきたいと思えます。」と話している。

### 「遊び心で学ぶ」をスローガンに寿大学で活動（石川県野々市町）

石川県野々市町の高齢者大学（通称：寿大学）「心寿会」では、定期的に、公園や公民館の清掃、花壇の整備などを行っているほか、会員どうしで交流を図るための旅行や能の鑑賞などを行っている。活動は平成10年からで、現在、60歳から90歳まで約130人の会員が活動している。

「心寿会」では「遊び心で学ぶ」をスローガンに、仲間と楽しく参加できる環境づくりに心がけている。

参加者は「活動を通じて、新たな交流があり、全体の活動だけではなく、個々のグループ活動が増えた」「参加意識が出てきて健康を意識するようになった」と語る。

石川県の担当者は「継続して講座が開催されることに意義があると考えている。高齢者の健康増進や生きがいづくりに大いに寄与していると考えている」と話している。

### g 高齢者による地域への貢献についての取組事例

#### シルバー大学生がボランティア窓口を開設（栃木県南地域）

栃木県の高齢者大学である「シルバー大学」の有志40名からなる「ネットワークみなみ」では、栃木県県南地域を対象に、月2回、シルバー大学生を対象にボランティア活動のあっせんを行っている。

ボランティア活動の希望を地域から収集し、希望する学生は「ネットワークみなみ」に申し込み、マッチングが成立したら活動を開始するというもので、年間121名が活動に従事している。

主なボランティア活動内容は「老人福祉施設の訪問」、「美術館の監視」、「図書館の書架整理」などである。

窓口として活動している高齢者は「市役所や社会福祉協議会に何度も足を運んで情報を収集するので大変ですが、参加者がシルバー大学で学んだことを活かしてボランティア活動を始め、地域に貢献していく姿を見ると、この活動にとてもやりがいを感じます。」と話す。

「ネットワークみなみ」では、「各自治体のニーズをさらにきめ細かく調査をして収集し、連携を図って地域に貢献していきたい」と話している。

### 老人クラブで重要文化財の管理(熊本県山鹿市)

熊本県山鹿市の「霜野老人クラブ」では、平成8年12月から、熊本県指定の重要文化財の仏像を納めた康平寺の管理を受託している。会員28名を7班に分け、輪番で寺に常駐し、収蔵庫の開閉、本堂内外や境内、便所、駐車場の清掃、参拝者(観光客)への説明といった業務全般を行っている。

会員は、参拝者が来ると境内を案内して寺の由来や観音像の彫刻技法などをガイドしていく。参拝が終わると、会員はお茶とお茶菓

子、漬物で参拝客をもてなし、団らんのひとときを過ごす。

ほのぼのとした温かい対応が好評となったこともあり、霜野老人クラブの受託後、参拝客数は倍増した。受託した平成8年度には年間約2,000名だったのが、平成17年度には約4,000人となった。一度来訪した人が家族を連れて再訪するというケースもあるという。一方、会員にとっても参拝客との交流はもちろんのこと、会員どうしの交流やガイド内容の充実を目指してのパンフレット作成等の諸々の活動が生きがいとなっている。

ある会員は「活動を通じて参拝される方の喜ぶ顔を見ることができるのでやりがいがあります。また、ガイドをさせてもらうことで私たちも楽しい時をもらっています。」と話す。

霜野老人クラブの会長は「活動を継ぐ者を育てていくことが課題となっています。70歳代前半の若い人に是非入会していただきたい。」と話している。

### 高齢者が地域の結婚の仲人役(佐賀県内)

佐賀県では、高齢者が「結婚相談P R A Z Aむつごろう会」を主宰している。

平成7年に高齢者大学を卒業した同窓生有志が「少子高齢化の現状に鑑み、微力ながら社会に貢献できたら」との思いから発足させたもので、現在、11人の高齢者が運営にあっている。

活動内容は、男女会員の募集、申込書類によるマッチング、双方に連絡しOKなら対面の手配、と出会いまでの段取り全般を受け持つ。基本的に交際そのものには立ち入らず、ボランティアに徹し、見守ることとしている。また、個別のマッチングに係る活動

のほか、年に1～2回、パーティを開催し、出会いの場の提供に努めている。

費用は、入会時に電話等の通信費、事務に要する経費として5,000円を徴収しているのみである（パーティ参加時は実費。）

平成14年以降で14組が結婚してきており、現在の会員は男性が約100名、女性が約50名となっている。

活動に参加しているある高齢者は「交際にはあまり立ち入らないのがコツで、見守るようになっています。会員が結婚できた時は生きがいを感じますね。これからも続けていきたいと思っています。」と話している。

#### h 高齢者の生きがい活動への取組事例

##### 「高齢者百人委員会」が「高齢者はつらつプラン」を策定（茨城県内）

茨城県では、平成12年から、茨城県社会福祉協議会に委託して「茨城県高齢者はつらつ百人委員会」を組織している。県内を5ブロックに分け、ブロック毎に100名前後の委員を知事が委嘱しており、全県では611名の委員がいる。目的は、高齢者自らがメンバーとなり地域の高齢者を対象に健康づくり、生きがいづくりに関する事業を企画し、実施することであり、茨城県全体の県民運動となっている。

具体的には、各ブロックにおいて 地域の実情にあった高齢者の生きがい・健康づくりを実践的に展開・支援するための「高齢者はつらつプラン」を策定し、策定したプランに基づいてスポーツ、美術、陶芸などの事業を実施しているほか、生きがいづくり、健康づくりに関する地域情報を発信したりしており、プログラムの数は60以上を数える。

平成19年度には、全国健康福祉際（ねんり

んピック）が茨城県で開催される予定であり、全国から訪れる選手・役員のほか、県内外からの来場者への対応につき協力していくこととしている。

##### NPOが陶芸、紙紐体験教室、作品展を開催（和歌山県和歌山市）

和歌山県和歌山市の特定非営利活動法人「新和歌山NPO」では、平成11年から、陶芸や紙紐といった工芸品の制作教室、囲碁や絵手紙による会員どうしの交流を実施している。「新和歌山NPO」という1つのNPO法人の中に活動内容ごとに有志が小グループを結成しており、自分の楽しみを見つけるとともに趣味の仲間を通じて交流を図っている。現在、会員は147名で概ね週2回活動している。

会員は、「楽しみや生きがいを感じられる」、「心身ともに健康な日々が送れるようになった」、「身につけた技術や力を地域で活かしたい」、「自分の楽しみを見つけ仲間づくりができた」と語る。

新和歌山NPOの理事長は、「この活動を立ち上げたのは、実母のことがあったからです。介護保険制度もない頃で、介護に疲れ、母の気持ちを理解してあげるゆとりがもてなくなり、疲れてしまいました。母もつらい思いをしたと思います。母は70歳手前で苦勞した人生を終えましたが、母に十分なことがしてあげられなかった分、今、寂しい思いをしている高齢者にどうか楽しく過ごしてほしい。そのために、家にいるような雰囲気でも、そこに行けば誰かがいて、みんなで過ごせる、そんな居心地のよい団体にしていきたいと思っています。」と話している。

新和歌山NPOでは、会員どうしの交流の

ほか、夏休みなどには、会員が子供たちに陶芸の楽しさを知ってもらうためのボランティア活動なども行っており、子育て支援にも寄与している。

### 「人生は常に笑顔から」を合い言葉に腹話術や大道芸の公演を開催（静岡県内）

平成3年1月、座長以下有志15名（現在は23名、平均年齢75歳）が高齢者の劇団「くにまる一座」を旗揚げし、静岡県の県西部を中心に特別養護老人ホームなどの施設において腹話術や大道芸などを披露する活動を行っている。

一座は、「人生は常に笑顔から」を合い言葉に、年間100回を超える公演を無料で行っているが、特定のプログラムは持たず、観客の好みに合わせてその場で腹話術、大道芸、舞踊、楽器演奏、パントマイム、歌などを組み立てて披露している。その場で組み立てることで劇団と見ている観客の高齢者との一体感が生まれ、活力になるという。

謝礼は受け取らないことを原則としているが、どうしても、という場合には、受領して実費以外を貯めておき、年末に社会福祉協議会などへ寄付している。これまでの寄付金総額は200万円を超えた。

座長は「私を始め、団員は観客からの『楽しかった』の一言に励まされ、芸を磨いている。笑いは生きる活力となる。今後も皆さんに元気を届けたい。」と話している。

## 2 市町村における高齢社会対策の取組事例

全ての市区町村に対して、独自に実施している施策の有無等について施策の分野ごとにアンケート調査を実施するとともに、その中

で特徴的なものをあげてもらった。その後、特徴的な施策について追加的にヒアリングを実施した。調査結果については今後とりまとめて公表を行なうこととしているが、ここでは、追加的にヒアリングした施策の中の代表的なものを紹介する。

### ふれあい大学：高齢者の学習機会を通じて心身の健康増進と社会参加へ（埼玉県・春日部市）

60歳以上の高齢者に学習機会を提供し、心身の健康を培い社会参加により生きがいを高めることを目指したふれあい大学を昭和58年から開講している。大学を開講した5年後には、大学院も開講した。大学は19年度25期生として、3クラス計240名を募集しており、各コース80名で毎月2回のコース別の開講を予定している。大学では高齢者生きがい・健康づくりなどについて外部専門講師を招いて学習している。また、クラス合同1泊による県外学習を実施したり、体力測定、そらまめ体操による健康づくりにも取り組んでいる。20期目になる大学院は、1クラス60名を募集する。大学院では、日本史や日本文学を中心に学習している。受講生からは、定年後の第二の人生において、最も重要なことはいつでも気軽に語り合える仲間づくりと認知症にならないための知識の蓄積であるという意見が多く聞かれるところである。今後大学・大学院の卒業・修了生を中心に「地域リーダー養成講座」を開き、こうした高齢者の経験や知識を地域のボランティア活動などにいかすため、人材バンクの創設・活用などにより高齢者が社会参加できる仕組の整備を図ることとしている。

## 地域の人材と建物を有効活用して見守りサービス（東京都・武蔵野市）

平成11年から、地域の福祉団体や地域住民が地域の人材と建物を有効に活用し、地域において見守り等が必要な者に対して地域のニーズに応じたサービスを提供する事業を実施する者に対し市が1千万円（テンミリオン）を限度として補助金を交付など必要な支援を実施している。家に閉じこもりがちな高齢者が地域の人々との交流により励まし合い、生きがいを得られるように助け合うことを目的としたものである。個人や市が所有する空き家を全額市の負担で改修して施設として利用することになる。施設の運営は、市の評価委員会の審査を受けて、ふさわしいと認められたNPOや民間の団体に任される。現在6カ所の施設が開設されており、それぞれ1日に7～20人の高齢者が利用している。各施設には、2～3人の常駐者が少額の手当でボランティアとして働いており、季節ごとの行事やバザー、合唱、喫茶、昼食などのサービスを提供している。施設利用者の評価は高く、高齢者同士の交流により認知症の進行に改善がみられた人もおり、共助の立場からの取組が地域に根付きつつある。市民の周知度をさらに高めて施設を増やすことが目標となっている。

## ワクワク健康づくりプロジェクト：プロサッカー選手との運動などを通じて多世代交流（千葉県・千葉市）

40歳以上からの健康づくりの取組が重要となっていることから高齢者の健康づくりや介護予防の普及啓発を目的にサッカー専用球技場を活用して、プロのトレーナーから直接指導を受ける健康づくり教室（ストレッチ、ウ

オーキング、ジョギング、リズム体操の各教室）や、プロサッカー選手と一緒に運動等を行なう多世代交流イベントなどを平成18年から行なっている。健康づくり教室は、毎月2回実施し、運動の習慣化を目指し、この他、講義形式の指導教室や体力測定なども行い、健康へ対する意識の向上を図っている。多世代交流イベントでは、小中学生とその保護者、高齢者が一緒になって楽しめる健康づくりや練習試合の見学会が行なわれている。開始して間もないが住民からの評判はよく、市では、まだ試行段階であるが、運動メニューや実施時期などを検討の上、参加者の拡大を目指し、壮年期からの健康づくりを推進したいとしている。

## 高齢者交流室、さわやか館：高齢者を閉じこもらせない地域の拠点づくり（東京都・小平市）

介護予防の推進を目的として高齢者が家の中に閉じこもらないようにするための地域拠点づくりと、児童の減少による空き教室対策が結びついて、平成13年に小平第二小学校内に高齢者交流室を開設した。高齢者が、主体的に楽しみ学べる、自由にくつろげる、児童と自然に関われることを基本理念として、地域住民との交流などの事業が行われている。高齢者交流室は、小平市社会福祉協議会が地域住民、教育委員会の協力を得て運営している。また、高齢者館「さわやか館」は高齢者が気軽に交流し、くつろぎ、語らいつける施設として、平成14年に都営アパートの1階に開設した。さわやか館には、高齢者用の施設のほかに、子ども広場（ミニ体育館）、幼児が保護者と共にお絵かきや積み木ができる幼児コーナーがあり、自然な異世代交流、ふれあいができる空間となっている。さわや

か館は、小平市シルバー人材センターが管理している。なお、いずれの施設でも異世代交流を活発化させるためのソフト面の工夫が今後の課題となっている。

### **住宅防火診断、火災警報器取付けPR：高齢者を巡回して防火指導（新潟県・柏崎市）**

火災による被害の軽減を図ることを目的として、70歳以上の独居老人及び老人のみの世帯を対象に、平成4年から住宅防火診断を実施し、火災予防についての指導、意識の喚起を図っている。火災に際して高齢者や体の不自由な者が亡くなるケースが多いことから、高齢者を中心として巡回方式で始めたもので、その際本人の健康状態や連絡先を聞いて非常時などに備えている。また、平成18年6月から新築住宅に火災警報器等が義務付けられたことから、チラシを広報誌と一緒に全戸に配布したり、各地区を訪問して説明会を開催している。

### **単身高齢者の見守り：お弁当を配って一人暮らしの高齢者の安否を確認（山形県・天童市）**

65歳以上の単身高齢者を対象に孤独死や閉じこもりをなくし、寝たきり予防と健康増進を目的として週3回、地域の弁当屋と乳酸飲料販売所に委託して食事（弁当）と乳酸飲料を届け、安否の確認を行なっている。食事（弁当）は、1食750円のうち材料費300円を本人の負担とし、残りの450円を市が負担している。乳酸飲料は全額を市が負担し無料配布している。また、平成19年度から75歳以上の単身高齢者等、約500世帯には、住宅用火災警報器を市が負担し無料で設置することになっている。住民からは概ね良い評価を受けているが、弁当が揚げ物や油っぽい料理になり

がちで不満が出るとか、1食を2日に分けて食べる人がいて衛生面の問題が指摘されるなど、今後改善を図っていくこととしている。

### **お休み処（どころ）：商店街の空き店舗を利用して高齢者が気軽に立ち寄れる居場所づくり（千葉県・我孫子市）**

買い物が大変で家に閉じこもりがちな高齢者が増加したこと、空き店舗が増加する中で商店街の活性化が求められているという二つの事情が相まって、市民からの発案を受けて平成15年に商店街の中に設置された。空き店舗の家賃は市が負担し、地区の社会福祉協議会、商店会などの協力により、現在1ヶ所で運営されている。盆休みと年末年始を除いて、毎日午前10時から午後4時まで利用可能で、買い物帰りや待ち合わせに使ったり、スタッフとの会話を楽しんだりして年齢に関係なく誰でも気軽に立ち寄れる場所として定着している。ボランティアスタッフが湯茶を無料でサービスしてくれる。お楽しみ講座、絵画展などのイベントも開催され、1日約40人程度が利用しており、集まった高齢者には話し相手の友達が増えたと喜ばれている。

### **ハートフルネットワーク・ひとり暮らし高齢者緊急連絡カード：高齢者の見守りのための地域ネットワークづくり（東京都・文京区）**

認知症高齢者や一人暮らし高齢者が増加する中、一人暮らしの高齢者を見守るために協力機関によるハートフルネットワーク事業を平成16年に開始した。ネットワークの協力機関には、高齢者の話し相手である話し合い員、民生委員、町会、新聞配達、配食サービス業者、警察官、消防署員等がなっている。協力機関による会議が開催され、問題点の討議、

情報交換、連携プレーのための体制を整えている。また、65歳以上の一人暮らし高齢者を対象に、昭和62年から緊急連絡カードの設置を推進している。カードには、緊急連絡先やかかりつけ医などが記入され、自宅の目に付く場所に置かれる。カードは、民生委員が高齢者宅を訪問調査し、希望者が提出した調査票に基づき作成される。カード情報は、区、民生委員、話し合い員、地域包括支援センターでも共有し、緊急事態に備えている。平成18年度末現在で、4,271世帯がカードを設置している。

#### **元気確認ポストカード事業：工夫をこらした手紙のやり取りで一人暮らし高齢者の安否確認（岐阜県・飛騨市）**

高齢者が安心して暮らせる地域づくりを目指し、安否確認とともに高齢者の地域との交流を図るために週2回往復ハガキを配信する元気確認ポストカード事業を平成16年から実施している。75歳以上の一人暮らしの高齢者を対象として開始したもので、本人や家族の希望により現在約100名に送付している。郵便局員から直接本人に渡してもらって元気かどうかの確認をしている。往復葉書の片面には、絵手紙サークルや神岡高校の協力による作品を絵手紙としてつけている。やり取りができるように絵手紙に公募した俳句を入れるとか、文章に最近の話題を盛り込んで少しでも読んでもらい、そして考えてもらえるような工夫なども行なっている。返信葉書は、自分の郵便受けに入れておくか、直接郵便局員に渡すことで、郵便ポストまで投函に行かなくても済むようにしている。

#### **ゴールドマイスター認定事業：高齢者が地域の農業技術や伝統技能の継承に貢献（岐阜県・白川町）**

60歳以上の高齢者で、地域に伝わる特色ある農業技術、伝統技能等で後世に伝えることが必要と認められるものを有する者、地域活性化に意欲があり、技術または技能を広く普及しようとする熱意が旺盛で、かつ指導力、行動力を有する者、人格円満で、心身ともに健康である者をゴールドマイスターに認定する事業を平成18年に開始した。認定は、この事業のために設置された認定審査会が行ない、技術・技能の特性に基づいて、特産物、郷土料理、芸能、工芸、農山村生活、文化、スポーツ、健康づくりの8部門が設置されている。ゴールドマイスターに認定された高齢者は、町のイベントに講師や指導者として参加するなどにより、日頃からコツコツと積み上げてきた、ふるさとのかおり高い技術や技能を広く地域に紹介し、普及に努める。町では、町民に対してゴールドマイスターに関する広報を行い、ゴールドマイスターが有する地域の伝統的な技術・技能が新しい地域づくりに活用されることを支援している。18年度には、23名がゴールドマイスターに認定された。

#### **プラチナパソコン教室：パソコンをやってみたいという高齢者の要望に対応（福岡県・太宰府市）**

60歳以上の高齢者を対象として、人生に生きがいを見つけ、介護予防にも役立たせるため、平成16年に事業を開始した。市が実施した高齢者からのアンケート調査で「今後やってみたいこと」として「パソコンとインターネット」が1位となったことも契機となった。

ネーミングをプラチナとしたのは、シルバーよりももっと光り輝くといった意図によるものである。夏、秋の2回開催しており、初心者A、Bの2コース、各40人を定員としており、毎回定員を大きく上回る応募があり好評となっている。参加者からは、パソコンの増設や授業内容のレベルに対する前向きな要望も出ている。この教室には、趣旨に賛同した高齢者のNPO団体からボランティアが講師として参画しており、高齢者が高齢者を指導し、教える側の生きがいにもつながっているというのが特徴となっている。